

令和 8 年度入学 社会福祉学部 学校推薦型選抜（一般）試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	新原 将義	「脱・心理学」入門 ― 10 代からの文化心理学	2021年 pp.129-139 より 一部改変	北樹出版

令和8年度 学校推薦型選抜（一般）

社会福祉学部

小 論 文 (90 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、3 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

エリクソンのアイデンティティ研究は、青年期を乗り越えるためにはアイデンティティを確立させることこそが最も重要な課題だという強固な物語を私たちの世界に残しました。「アイデンティティの確立」は、私たちが生きていくことにどのように関わるのでしょうか？

ホルツマンは、伝統的なアイデンティティ概念の「一度形成されると、生涯を通して変化することはない」という特徴を指摘したうえで、こうしたアイデンティティ概念が私たちの生き方に対して限定的な意味しかもち得ないという欠点を指摘しています。その欠点とは、この概念が私たちの「発達」に結びつかないという点です。

アイデンティティがもし、青年期に確立されるべきものであるとしたら、私たちは青年期以降、変わらないアイデンティティをもちながら生きていくのだということになります。本当にそうでしょうか？「自分とはなにか」という問いに対する答えは、大人になったら一生変わらないものなのでしょうか？

(中 略)

パフォーマンス心理学の重要な概念に、「being」(〇〇である人)と「becoming」(〇〇になる人)というものがあります。パフォーマンス心理学では、人とは常に、being な存在であるだけでなく、同時に becoming な存在であると考えます。

私たちは、ありのままの姿であるだけでなく、常に「〇〇としての自分」をパフォーマンスして(演じて)います。「パフォーマンスしている」とか「演じている」というと、嘘をついている、自分を偽っていると思われるかもしれませんが、そうではありません。私たちは常に、「〇〇としての自分」を他者に示し続けることで日々を送っています。例えば友達とくだけた口調で話したり、ボディタッチをすることは、その友達と自分がいかに親しい間柄なのかを自分たちやほかの人たちに示すことになります。こうした「親しい友達」としてのパフォーマンスなしでは、「〇〇君と友達である自分」でいることはとても難しくなります。

また、みなさんはお父さんやお母さんが、昔からの友達と話している様子を見て、「いつものお父さん・お母さんちょっと違うな」と感じたことはないでしょうか？ 親というのは多くの場合、子どもの前では「親らしく」ふるまおうと努めるもののようです。しかし昔からの友達と会った時に、「ちゃんとシャツはズボンの中にいれなさい」とか、「最近、友達とはどうなんだ」とか、「ごはんちゃんと食べてる？」といったような「親のふるまい」をすると、途端におかしなことになってしまいます。同じように、私たちは常に、様々な場面で「高校生である自分」「先輩である自分」「新入りである自分」「恋人である自分」をパフォーマンスすることで日々を送っています。このような、「〇〇である自分」になろうとし続ける私たちを示すのが、「becoming」(〇〇になる人)という人間理解なのです。

この観点から、改めて伝統的なアイデンティティ概念を見てみるとどうでしょうか？ 伝統的なアイデンティティ概念は、一度確立されたらそれ以降変わることはないという点で、being な側面しか

見ようとしなないものであると考えられます。一度確立されたら不変のアイデンティティというのは、その人が今「どういう人であるのか」を問うものであり、「どうなるのか」や「どうなろうとしているのか」にはあまり目を向けようとしなないものである点に限界があるといえるでしょう。

このような、私たちの being な側面にのみ注目する伝統的なアイデンティティ概念を中心にとすると、「自分を見つめる」ということも、今の自分がどういう人であるのかという being な側面のみを考え続けるということになってしまいます。

(中 略)

既に述べたように、私たちは常に「〇〇君と友達である自分」や「先輩(後輩)である自分」「高校生である自分」「大学生である自分」といったような、「〇〇としての自分」をパフォーマンスしながら生活しています。このパフォーマンスは、生活の全ての瞬間にあり続けます。

そしてこのことは、幼い子どもの場合も例外ではありませんでした。特に幼い子どものころのパフォーマンスには、ある重要な特徴があります。それは、パフォーマンスが常に「1 人ではできない」けど「仲間と協力すればできること」に関するものになっているということです。例えば言葉を話せない赤ちゃんでも、常に周囲の大人たちとの協力のなかで、「話者である自分」をパフォーマンスしていました。また、みなさんは幼い子どもが、文字が読めないはずなのに大人の真似をして絵本などを音読しているふりをするのを見たことがありませんか？ この時も、子どもは「本を読む自分」という、今の自分にはできないパフォーマンスをしています。そして周囲の大人たちはそれを、「そのページにはそんなこと書いてないよ」などと言って制止することはせず、「すごいね、本読めるんじゃない」などといったような働きかけをします。このような関係のなかで、子どもたちは常に「頭一つの背伸び」をした自分をパフォーマンスしているのです。

しかし、大人になるにつれて、こういう背伸びしたパフォーマンスの機会は徐々に減っていつてしまいます。なぜでしょうか？ ヴィゴツキーの発達理論に基づいてさまざまな社会実践を行うホルツマン(Holzman,L.)はこう指摘します。

「アイデンティティは、世界に開かれたり洗練されたりすることへの(意図せざる)抵抗ないし沈黙である。(中略)私たちは皆、アイデンティティによって制約されている。時や場所によって度合いもさまざまであるが、自分のキャラクターをはみ出して何かするのは、心地よくないし怖い。」

「自分らしさ」を確立するということは、「自分らしくなさ」を捨てていく過程でもあります。それ続けていくにしたがって、徐々に「自分らしくない」ことをすることに、居心地の悪さを感じるようになります。それによって、私たちは次第に、意図しないうちに、常に自分が心地の悪さを感じない「自分らしい」行動を自動的に選択するようになっていくのです。

意図せずに行われる「自分らしさ」や「〇〇らしさ」は、それ自体は悪いものではありません。例えば授業中の教室の秩序を考えてみましょう。私たちは特に何かを意図することなく、席に座り、

先生を「先生」と呼び、先生が話している最中は大きな声を出さないようにし、できるだけ教科書やノート、黒板などを注視するようにします。こうした「生徒らしい」行動のひとつひとつが、授業や教室という秩序を作り上げているのであり、逆にこうした行動がなければ、授業は成立しなくなってしまう。この例に限らず、ある秩序が保たれているのは、その場においてふさわしい「〇〇らしさ」を皆が実践しているからであるといえます。

しかし、こうした「〇〇らしい」行動ばかりを自動的に繰り返し、それが固定化されてしまうと、「頭 1 つの背伸び」をするような機会はどんどん減っていってしまいます。「頭 1 つの背伸び」は、今の自分や、その場での自然な行為とは少し違ったパフォーマンスをすることであり、それはアイデンティティを確立した私たちにとってはとても居心地の悪いものであるからです。私たちはこのようにして、「自分らしさ」やいつもの「〇〇らしさ」を再生産し続けることに安心感を覚え、それ以上の行動をすること、発達することからどんどん遠ざかってしまうのです。

(新原将義『「脱・心理学」入門——10 代からの文化心理学』、北樹出版、2021 年、pp.129-139 より、一部改変)

問 1 「伝統的なアイデンティティ概念」と「著者が論じているアイデンティティ概念」の違いを、本文に即して 200 字以上 250 字以内で説明しなさい。

問 2 下線部『自分らしさ』を確立するということは、『自分らしくなさ』を捨てていく過程でもあります」について、本文内の「being」と「becoming」の概念を使って、あなたの経験を 500 字以上 600 字以内で述べなさい。